

世界中の社会の混乱—今こそ読書を一

神戸大学大学院法学研究科教授 井上 典之

2019年末からの新型コロナウイルスの感染拡大で、2020年に入り様々なところで混乱が生じている。公立の小中高等学校は突然休校措置が要請され、児童生徒は自宅待機となっているが、大学や研究機関は必ずしも休講の対象にはなっていなかった。ただ、研究者はこのグローバル化社会の中で、しばしば海外に出かけていく。何を隠そう筆者も12月初頭まで中国・武漢に滞在していた。帰国後すでに3ヶ月が経過していることから、幸いウイルスには感染していないようである。年明けに帰国していたら、大学本部からの指示で2週間自宅待機が義務付けられていたところになる。まあじっくりと時間をとって本を読むなどということがほとんどできない状態にある身としては、社会の混乱をよそに、自宅待機で読書に勤しむ時間があってもよかったのではという気持ちである。

研究者でなくても働き出すと読書をする時間というのはなかなか取れるものではない。体調を崩してまで読書のために休暇を取る必要はないが、若いうちに本に親しむというのは非常に意味のあることではないだろうか。筆者の中学生時代を思い出すトイレトペーパー問題のように、最近の若者はスマホやタブレットでの情報収集には熱心であるが、本を手にとって活字を読むということがほとんどないように聞く。自宅待機で時間のある時こそ、本を手にして読書に勤しむということがあってもよいのではないだろうか。中学生や高校生は、読書というと勉強の一種と勘違いしているところがある。夏目漱石や森鴎外、あるいは太宰治でさえ、入試に出題される題材の一種ととらえ、読書＝国語の勉強と考えているふしがある。そうではなく、リクリエーション・余暇の過ごし方の一つとして、読書というものを見直してもらいたいと思っているのは筆者だけであろうか。

人文社会科学系の学部に入學すると、まさに専門書を読むということが学問の基本になる。その際に、高校までに読書の楽しさを知らない学生は、大学での勉強方法に悩むことになる。外国語の書籍であっても、日本語がしっかりと分かっていない学生は、専門用語だけでなく、普通の言葉を理解できない状態に陥る。大学に入學してからでもいいので読書に勤しんでもらいたいと大学の研究者は感じているのである。難しい本でなくても例えば新聞に連載されているような物語でもよい。自分の興味が湧くものであればなんでもよいのである。ただ、世の中の移り変わりが早く、様々な情報が簡単にネットから得られる現在、なかなか読書に勤しむ時間をとりにくい状況にある。自宅待機が要請される今こそ、コロナウイルスから身を守る方法として、じっくりと本に親しむ時間を持つべきではないだろうか。

ウイルス感染の震源地となった武漢は、三国志の舞台になっただけでなく、辛亥革命の発端となった場所でもある。武漢に行くとき現代中国のスローガンとして社会主義核心価値が至る所に掲げられている。それは、富強・民主・文明・自由・平等・公正・法治・愛国・友善であり、これらの単語は、戦前の日本から中国に輸入されたものだといわれている。いかにして、またいかなる意味でそれらの単語の逆輸入が起こったのか、それを知るのも戦前の日中関係に関する歴史小説の読書によれば、簡単かつ面白く知ることができるのではなかろうか。